

音楽科の鑑賞活動における 概念的理解の深化を促す授業実践の検討 —関連づけを促す発問の影響について—

溝口朗央 (東京大学大学院)

キーワード: 音楽科, 概念的理解, 授業実践

問題と目的

メディアの発達と普及により, 音楽の「聴き方」が多様化し, 日常生活の中で音楽に触れることが容易になったが, 音楽科の鑑賞活動に対して, 苦手意識を持つ生徒は多い (国立教育政策研究所, 2009)。音楽科の鑑賞活動では, 生徒に音楽を聴かせ, 教師が楽曲の歴史的背景を教示し, 感想を書かせる, という授業実践が一般的であり (今, 2013), 言語活動を取り入れることで生徒の主体性を引き出したり, 音楽経験に対する理解が深まったりする一方で, 記述させることを目的とした授業にとどまっていること, また音楽に対する理解と文章自体の評価が混同されていることが課題とされてきた。

そこで, 楽曲に関する思考プロセスの 1 つとして, 「諸要素とその変化」「楽曲の感情的性格」「文脈的情報」といった楽曲の構成要素や既存知識が関連づけられることを想定し, これを「音楽の概念的理解の深化」として定義した。本研究では, この概念的理解の深化に対して, 楽曲の構成要素間の関連づけを促す発問が, どのような影響を与えるのかについて検討することを目的とする。

方 法

調査対象者と実施時期 福岡県内の公立中学校 1 年生 132 名 (実験群 68 名, 統制群 64 名) であった。実施時期は 2019 年 10 月下旬から 11 月上旬にかけてであった。

調査内容と手続き 事前調査, 2 コマの授業, 事後調査の順に行った。事前・事後調査では, 初めて聴取した音楽 (事前は, くるみ割り人形より「行進曲」, 事後は「流浪の民」) について, 自由に記述させた。授業ではシューベルト作曲「魔王」を取り上げ, 生徒は, 音楽から想像されること, 音楽の諸要素の変化, 登場人物の特徴について, それぞれ考えを深めた。その後, 音楽の構成要素間の関連づけを行う際, 授業者が関連づけを促すような発問をした実験群と, 授業者によって構成要素間の関連づけを行う統制群の 2 群を設定し, 授業前後の自由記述の変化を比較・検討した。

結果と考察

事前・事後調査の自由記述を, 関連づけに関する水準として, 楽曲の構成要素のうち① 1 項

目について記述している, ②複数の項目を並列に記述している, ③複数の項目を関連づけて記述している, という 3 つに分類した。

事前・事後調査における人数分布の群間差について, Fisher の直接確率計算法 (両側検定) を用いて検討したところ, どちらも有意差は見られなかった (*n. s.*)。

事前・事後調査間での各群内の人数分布の変化について検討した (Bhappkar 検定) と, 両群ともに有意であった (実験群: $p < .001$, 統制群: $p = .002$)。さらに特徴的な水準間の移動を検討するため下位検定を行った結果, 実験群では水準 2 から 3 ($p < .001$) で有意, 統制群では水準 1 から 3 ($p = .054$), 2 から 3 ($p = .086$) で有意傾向であった (Table 1 参照)。

以上の結果から, それぞれの音楽の構成要素について理解を深めた上で関連づける授業構成が, 音楽の概念的理解の深化に対して有効であることが明らかになった。また, 事前調査の段階で音楽を多方向から捉えていた生徒には「なぜそのように感じたのか?」といった根拠を尋ねる発問をすること, 音楽を特定の方角から捉えていた生徒には, 教師によって関連づけの教示を行うことが, 音楽の概念的理解の深化に対して効果的であることが示唆された。

また, 授業過程の分析から, 歌詞がある楽曲では, 音楽に付随する情報を適切に理解, 解釈することが, 関連づけの促進につながることを示唆された。

Table 1 各群の自由記述における水準変化

後 前	実験群				統制群			
	1	2	3	計	1	2	3	計
1	14	7	7	28	13	6	13	32
2	6	9	18	33	7	10	8	25
3	2	1	4	7	4	1	2	7
計	22	17	29	68	24	17	23	64